



玉珠小抄





源氏物語のちりさくまやうりあま
 うれとあまいあまをくろおや
 けこめゆきまきぬものあもれも
 ちりの物もこもをさく子に満
 なくもゆあいのさまもくまひも
 あまおるを浮コトバのさ城あこのもの
 りくをさけふる様いああきやお
 ゆくもさくしああぬこあ



ほろかな舞—まげをいり—年終屋乃
美そのかきうのきう移そこの様みされ
つるきちと記まけ孫く子玉のをこし
をとりつる孫のこりり世ふけ物ほも
てあまよ人のこりるさるななくなんま
あさしたまはの物ほをこめく
と記あか—孫く—まのまはあ—も品おや
—うらまゝ家—も紙書らる孫いる

まのや—まげまは程おせりともい
ま—うぬをき難屋の美あけ伊勢
海ふむらの孫—孫く孫字—まのあ
免た—おき形の—山まをけい海やあ
ふ味のほうぬ—お下の心まのま
く—ま—まきまの孫會の—のあ
まのま—ま—まあ—のなり—今は書板ふ
まのま—ま—まの—ま—ま—ま

とまじかたしと物さかとのいふいづあたる
をいふいふもかきくはしおのま
もかたのたきまの世ふかきくはし
しきふたやもえあき傳うたの森

又四書一八月 醉存園 森嘉基

源氏物語玉小櫛補遺上卷

桐壺卷

鈴木服著

まつまうのちせのふ 四のむら 右 森嘉基云のいとありしを思はるるべし

あやいとえんてまつまのへるを 八のむら 左 こ小脱あふべいと故大人小さ

まにきくしるを小様よいふてしり

女内も内おちのゆぬ 廿のむら 右 あの一のこの女内はえ一疑へに應ぜり

けうーろとむら 廿五のむら 左 ち溜るべしさふらふ人けうーろがちて

あせなるあり

えんちあへ終るべ 廿五のむら 左 あのをづうげよおすきをよ應ぜり

かーづねまふ田の君 廿のむら 左 まふよ向まらるる

小あう世一のむら 頼ひあうのまゝで、初世一のむらのわいせ二のころあふべー

かゝるふはあふあうある世一のむら 云あやー世一のむら この語勢すては結びの

さまありがくて又光る君世一のむら 云とひいて、あ世一のむらの文のこまうどを引ひ、又

次のその書出ーよつぐくやう世一のむら して結びるさはいらんう世一のむら かく

面白ーこの結びるやう、洋文世一のむら してはた傳の、七月之卒、章、蔵、米

之道、孟子の、能言距揚墨、あど世一のむら 小うく世一のむら すべては書、卷、この結

びよ世一のむら かく世一のむら 味世一のむら べー

帚木卷

いひけられ世一のむら 終ふとが世一のむら けとがを師の好むのとがと解き世一のむら する

い世一のむら づく、好色の外の世一のむら ところあふべーがの須世一のむら へは流され世一のむら ぬふ時の世の風説

も、好色の色世一のむら のこふ世一のむら あ世一のむら ざりーやうの頼ひあり、若好色のこのとが
とーしてハ下れい世一のむら とつ世一のむら 初世一のむら 安えが世一のむら ー

あふ世一のむら びう世一のむら 小あう世一のむら ー世一のむら ね世一のむら ず世一のむら かく世一のむら して世一のむら 云世一のむら 同世一のむら 是世一のむら ハ世一のむら ぞ世一のむら く世一のむら 小ある世一のむら 姿をおと世一のむら ー

免世一のむら づ世一のむら る世一のむら と同世一のむら さま世一のむら して、源氏の君れ世一のむら る世一のむら をかく世一のむら つ世一のむら 小世一のむら 所世一のむら 作者の昇下世一のむら して、

このお流世一のむら の作世一のむら ば世一のむら ま世一のむら のつ世一のむら かく世一のむら 小あう世一のむら ー世一のむら ぬ世一のむら ず世一のむら ーと下世一のむら じ世一のむら こと世一のむら 已

ま世一のむら する世一のむら あり世一のむら が、この世一のむら 少世一のむら ね世一のむら の物世一のむら 流世一のむら 又世一のむら い世一のむら せ世一のむら お流世一のむら かく世一のむら のあり世一のむら と世一のむら いか世一のむら ち

ある世一のむら ー世一のむら あり世一のむら ざれど世一のむら そ世一のむら 小世一のむら あり世一のむら して世一のむら 云世一のむら 同世一のむら 是世一のむら ハ世一のむら ぞ世一のむら く世一のむら 小ある世一のむら 姿をおと世一のむら ー

あ世一のむら して、お世一のむら の世一のむら 向世一のむら ち世一のむら れ世一のむら を世一のむら 保世一のむら く世一のむら ー世一のむら して、え世一のむら る世一のむら 人世一のむら の世一のむら こ世一のむら 小世一のむら ふう世一のむら く世一のむら 感世一のむら ず世一のむら る世一のむら や世一のむら ー

に世一のむら せん世一のむら ー世一のむら 免世一のむら ち世一のむら ある世一のむら ず世一のむら 小世一のむら 様世一のむら の世一のむら 袖世一のむら ね世一のむら だ世一のむら む世一のむら 符世一のむら の世一のむら 亦世一のむら よ世一のむら ざ世一のむら れ世一のむら づ世一のむら ぐ世一のむら ぬ世一のむら ー

女世一のむら まで世一のむら え世一のむら ち世一のむら ー世一のむら ま世一のむら へ世一のむら ー世一のむら 左世一のむら の世一のむら 初世一のむら 江世一のむら 戸世一のむら 人世一のむら 石世一のむら 川世一のむら 雅世一のむら 堂世一のむら が世一のむら 源世一のむら 流世一のむら せ世一のむら 通世一のむら 漏世一のむら に

云々の後いづくよけりても皆その人を女としてとりよすあり。
且女はありやもあらずといへばされど葵の女も女としていん
すてくなくあんなたまひびとまりあんな—又林の女共九の
御小
後壺れ女の東宮の御子まぎの御子あるなどと思ればこの後ひ
がことある

かこちまきこあげなく十の御是よりしてかくすありたりといふま

でたぐ一種の女のさまあり。傍注よ六条の易本を向てしるふゆたが
へは是より本枯の女の御と入るもとあり—

よろづのゆふもへておがせ十五の御この作者を思ひこらぬ
ゆや古た物候小あるやうのをよけりて異やうあるゆをすべて

せぬもあられし人の心世中少事あるべきゆゆのこをまてつて
あてぎんがよめづ—く中く小見候くゆれあれた城小上はれ
ざありこのたしハ下小まきをこえしるゆや。まこさしでもをもゆ
よりかくるんをえあればおのづこここのおうしるゆや
おもひ給へゆるまもト免のゆ十六の御ゆるはきりし御あらずトハ
はぐく意也

いとゆり—かく給ひ侍—もうるさくて十七の御侍—はう侍さされ
どあるあるべ—さしでハ次の支小も又後のたぐけよくた方云と
あるおもつて御掛あひいづあり

くろろをささえず十八の御上のんをささえずく小意也

筆れあしを般涉調右 廿四のひら

楽のすがら般涉調へかゝるまづとある

向りさる小因てけ女のんさまに先合せて今めううく云こと

あり

さてその文の廻右 廿六のひらへて中おのる入てまづ一抱をもえい

る体のううう面白たうたがまありかの左傳の有窮后羿晋侯曰

后羿何如とあるおも是も同ト左傳の注家いさうにこれをゆゑ

ぬを式初ハ才子なる故ふよくさとりてうつ一取たるふや又ハさう

ずとも女子どちらの志こがいのづう符合もあつたけり乃品定

ま皆論のことなる中よまうしは有一りの昔流のゆるもけり限

とてほよづくるをそのあらう小け一辰を授けられたほ

のまゝの伏脚とあるといとおも

くすしかうん右 廿八のひら 年山打守一少字治捨ま二の右邊お監下理厚行

云。抱いこくすくいむやつハ云いこく抱忘くす一抱ハ云を

引てそれ合せてそのくす一を講ずべと

何るをとりヤさんと同 嘉基云。とりヤスハ中上るといふわどの廻

ありけ抱流も。化の抱流も。あく又えさる皆そのさありい

くうやまひくうあををとりハ。字舟也右 廿二のひら 女房小抱さう

ヤさんといをせとま

こ流きたらん云 廿二のひら 云左 くれハハ。後壺宮をさけるあり

抱け流る右 廿八のひら 嘉基云。それより小君が廻あり。抱け流るハ。ゆけ

抱と同ふやうの時の廻あり。後衣抱二のさしてく。先おまふ一きんとて。
 立ち—アして向—おとすおどろく—ちうづらふ—道中
 より抱け終る。姫君のおまふ一男一りあ—て侍りいづつうは
 つんとする。といふ—のいとまぬ二云。取く一や抱二のさ
 ーううてめ一け終るとある。夢一うちおどろかてん何げ終
 へもど。あある時ぐたいこぢうなづう—げよおぢりけの人みえ
 めく抱をまらして思ふ一あり。うちほ—あてて。さ一ハ二いづ一んず
 云云。これね—もておまふ—
 ねたうん—めして二世八のむら一 終たうせきさるべ—。ね—。あぢ抱さ
 く。と狭く心あり

何あさうりハさくさるるなり世九のむら 是ハ草子地かぐ。源氏の君の心
 小ありていへるあり。あ一の火かげあ一とすべ—とあるも同—。す
 ていたがひは。作者も時其人の心よありてかける故。お一のづ—。む
 者もまのあ—り又さぐぬく。小おぢりあり
 かか—とあさま—き二世四十一のむら一 ちうま下一のふうくあさけあ一云
 へつてきていとあさま—き—り—て。お様の詞あり
 ふ—たまへア二世四十六のむら一 又ときこえよこの終へ一 ころ小至りてかく
 け女君とあがまへいへるハ源氏君の思ひ人とあり—。よ—りてく
 かる—。抱者さへとりそ—ん男の覚えを世四十七のむら 右 ちんよてきさ
 日ろ—。覚えをよてきさるべ—

空蟬巻

おぼしころふとと思ふよニのウ くるの下小よれ字をそめてんはべし

けれあふまし一必しもてよをはの保又字一保もあふべ

そこハちよとそ何く免五のウ 持ハ今俗よひせきののみあり唐の暮れ

小又えしり

あづま重ぬあり六のウ 是より保の詞とするを小根よとらしとせし

せしるといふ

夕魚巻

かの夕魚のあふべし一陸舟をうり十五のウ かの夕魚のあふべしとあふせ

えふふいしとあふせととあふしこのあふりのさまあてハげ陸舟を免し

つとあふしといふとつとあふし一げ陸舟をえとバ忽源氏の君とハあふし保べ
きことあり

垂れあふかふあふん十八のウ 夕魚のふさまをらふあり湖

月傍注保あり

おしと思ふ一あふ廿五のウ おか一地あふあふねどそ人をうつく

しとあふあふおがし一あふしあてあふしときあふとあり保の化者
の界下あふし又その中のむつま一地をえとせしる

名跡あふありしとあふしあふあふし廿五のウ 湖月改書君子地と名しる後

よしとあてハ内の字保あふし廿五のウ 嘉基ハ云こあ夕魚の上れこととのこまへる
あり源氏君よあの上をうらあせしてさしひまふまはれともあふれあ

くろねはとも名宗持もぬをんのうちれびとこのまはるんく

世中のとあゆみゆと 世二つむら 左 かふるゆもとつを畧記するあり

おほひ原の君 世四のむら 左 けしふとてとつ詞あるべーおちるるあらん

かーこくゆしめ 世五のむら 左 嘉基云小様いふこのうーこくはかーけあーのこ

とハ是こおろろある涙ぞ神小をといへるおろろのうーあり伊勢物語小むじ

をここ女いとかーこくおひうさーてこんあうりたり又同書昔かや

の又ことナこおひーまーたりては子女をおひーめーていとがー

こくめづつうう結ひたり大和物語づの中納言のまこ十三のみこれ母

とやまんおをうちになりたるもめあえとハいとおひーめらんをど

いとがーこくおまひぶが兒持ふたりおとこの外あまこあり

うちかちー結へアー 世十のむら 右 がもー行あるべー

お母ーあけくめ 世十五のむら 右 めりーとつてはをはハ細はずかあ

ず保あふべー

えー人のくありをま 世十七のむら 右 烟とまをといまぞかひるあー

いけるかひる兒や 世十八のむら 右 けやハおをまびりては詞よよ小同ーたや

ありもーあがきのや又問詞のやあふかひあーやとつふべー

又このむに 同 蝶の羽の縁の決あり

あやーやいふ小思ふらん 同 あやーとハ板あーくえんらーたやうある

をいふ詞よよは女の破瓜の子をさーてのまへりさそそれをおのむ

うふつぶかーく思ふんと思ーめんまこ小様のと記うこよそはけ文

意いまごめりりあ〜ん

願文つくりせ給ふ 甲十九のむら 左 草稿をかきて又せりひてげ秘めてさりぬべ

く取つくりひあ〜むべれり〜仰せ〜をりあり。下ふたどかく

あが〜云とあるありあ〜

是れ 五十二のむら 左 是れ忠輝と夕景とをりハハ〜

あが〜。廻の面ハ九月並小書り〜秋を返り〜といひりふ立をよ〜

ぬる妹をりり列〜と〜ひ〜ありさ〜でハ立をのり〜

〜。廿八十月小ありてのりあり。細流の川流を〜とすべ〜

人〜人〜 終のむら 源氏君よき〜ん限りの女をき〜とほあ〜

他人の〜とせんハものやめぢら〜とあり。小松ハ〜

若紫巻

孫つみのとらひ 云 六のむら 右 産業のりあり

法師まさり 同 桐壺巻小あげお〜と〜と〜廻の歌中。法師よありて

〜り〜のまけりて又あるりをりあ〜

け母の〜ありりふ光源氏 十のむら 左 け廻〜の〜あ〜し〜あ〜と〜

あ〜り〜と〜ありしを返さ〜の〜あるとが〜海〜く評判

はるをりあ〜

何か〜けさ〜り〜とハ 十一のむら 左 〇ハと返さ〜

いと〜り〜思ひあひ 十二のむら 右 思ひあひの返あり

おとあ〜もあり 十五のむら 右 終ふる物と〜あるべしあり。終物と

あるハ保あり

流のよどろもまたうりて 同よどろく小用あり 是ハ必とをくを得る
るあるべし

此くどお何くれと谷のそこまで 十九のむら すべてま中よくどお物とあるハ保

今世の双蓋の丸着とりお物のねと見えようこれおの洞をさてもまだ

あきど佛もの一徳堂よするゆりはよまん 同頃ハは日比の比々時刻を

りふあ〜は信注小物ねのつとめありとあるハたぐりさてハ次の洞と

手を後せり

男ひわつきと 廿三のむら 男ひきつとどあるべし

男とびよ 廿四のむら 小娘の流のどろ〜さて上の男よるもうちうとんえ 云よ

里すべて皆源の洞あり小娘あやま〜れり

いうでうのぞり小娘くまひつ〜ん 廿五のむら 中のま〜ゆて〜し小娘よ娘ら

んとある中を〜とせ〜し〜の〜い〜

さむかりいそけあうり〜け〜しを 廿六のむら け下よと〜あ〜る〜べし

くち〜くおも母〜の娘ふさゆ 同く〜くおも母〜ハつ〜う下〜のう

〜る〜か〜る〜あり

〜も又あふ夜まわれある 廿八のむら 又あふ夜のみれあると夏の今ふ世の稀お

る〜し〜う〜け〜る〜洞あり

いつ〜もあ〜く〜れ〜る 廿九のむら 〇い〜の保あり

板〜やすふあ〜くれ 卅五のむら けふハは祖母どらふて必放〜やまふの母君お

ひんむしきまをさうりてまじりてふ右 廿五のむら ままハ晴之腫ハあぐべ下ぢら

とくもてあつべ

むの巻小いで右 廿八のむら けをふいへ目鼻のそああり

まけてやこま右 廿九のむら まけてハ算てけけりて濁るはら

けさうだつすぢあうんやすたあ同 けさうだつすぢあたあ小令ぬ

んやんきあり抄あやまれ

くいや右 卅二のむら 是ハやの巻あるべすハヤハそハヤす奴もそやつあ

思はるぬあうさてそよその意俗ふそやとつ約の

かぞはむしりあ左 同 命ぬが獨あうハあり傍注細の注説

さうりてまきえと右 卅三のむら け下よぞとつあんとあるべ

けをひうちそよ免き左 同 そよめ記てよてハまだやうあふんとすゆ

○作里お渡の巻老の心を造化の神意むすびの神のこまをぬすて用て
上よちどそ有格とく似てり源氏の君の夕白の方にあひ移ひハ不きふ
るゆもてかうくあり小ありしゆ糸木の巻小しる巻小おのづから小令
アそそ小つけて又さるゆもあんとんぐけて求めむひハ小思ひの外
小末摘のやうあ人小とら縁あてりむひハかのもろこの誘よ五事不
魚入計較一生都是命安排とつるよ同巻之巻も又夕白の如く
ある人のゆをうねとを何の真もあるまどたよととら板かりたる
巻よ移るべたゆの板ありつむく巻よいとく一年のゆ一生の間かねて
のあま一皆さひひりくとるまおのづからたがもぬゆもあまいとい

物に定めごとくたゞ不定とんぬぬるれどもまことよめたがもびとしくも
上は始終源の思ひありたるまあるかどは述べてすべて世中にも
うくうつとらして讀むの小作るとりあることとまむむるは上よの
も後あり

紅葉賀巻

源氏の中ね大とのの歌の中將 二のむら かく改めてかたるはおほやけの人ことり稱す

るきあり

うくそゆーこの後よ 三のむら 孟又細よ神のよとらーこの後よびまうことあ

るいいうとさるこころはこころ

そくあり 左 同 右 こころこころーのこころ子あり

かいま 四のむら 三四十人の人まめぐりて笛ふくさはおほ人のためよ八垣の如くある

板ふかひまろとつよある

いとぐかのころ 六のむら いとぐといふこと下のおおひりりかあり

をさあ紀人のえついまま 左 同 右 入つきまふありえんあひるこつくと

りか廻すつくとけらひつくと俗流ありつくとどのつくあり

むこよかん 八のむら 一本小むこよとあるぞよれ

かとうい 十一のむら ともあつひのふはんの 右 ままふおきるあり

一あひいふはんと八源氏の君も又はんおごりよらうあひり

後ふをいふあり行先物後小がくだいぐーやあひりすべきあり

をいといふは書便あり

とすづり十三のむら すがど 湯るまら

人のこなるもあや—かまつる程のあやまら十四のむらを 傍注非あり

けりハ若鷲の巻より。葎の宮ありの移ひて。いづ月ありてはに

懐妊—まひ—をりふあり

んゆぬあまら十二のむら 葵の上を源のんゆたてハおぼせぬあるべ—とん

ゆく—ハ俗小存分あといふことあり

くらあれりをもいひあれまふ同 帝のあり。月あり—やあ—同 官

女達さるふ小同あり。及ふやそれよ合せてハ皇子の源氏の君ハとあり。抄の

説文義つてかゞ

すきんあ—と考ふまてあやむあるを十三のむら 内侍のむれ官女達の源氏の

君をばとあり。傍注ありとてし詞かんがへ かんくすぶれん

内侍の源氏の君をばとてし詞—あかりさる—とあり

んまほ—まの限ありたるを。や同 一本とあり。おれを小格よ—と

せ—あひ—いふ

こわ—と十七のむら こ—清—いふがわ

あまあのみまや十九のむら おまあ—ハ面皮の厚く。能あ—ぬさる—古ハ能

—ハ面皮あれりをつるが後ハ能—あり

いとんまらりてい—げ十二のむら い—い—い—あ—

花の宴巻

とてさのハ二のむら 小格小—ま—とあまら。今—あ—の向ふ—い—り—あ—とあ

るを上げぬぐ〜そのまじ〜いなるあぐ〜

つた小臥中ぬ云同 人の目うつ〜ま〜あ〜びと中將のふおほゆべらえ
ま〜と〜ま〜つけてはするんま〜ん〜い〜い〜い〜い

やすねるあれど〜る〜げあり三のむら げにぬ早の所況〜やすま〜い

上のはめ〜こ〜りふた庭小まじつ〜い〜るをうけ〜る〜げあり上
のまじ〜〜〜と〜ま〜〜ま〜〜と〜ま〜うけ〜るあり

源氏のおやん 同 こ〜ま〜ま〜る〜上〜の初小ゆび〜舞〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い

やを〜い〜たおろ〜て 五のむら 上ふやを〜のが〜あ〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い

ふ〜い〜い〜い〜い〜い 十のむら ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い
句あるをいふ上の若菜の毛十のむら〜い〜い〜い〜い〜い〜い
あるあ〜い〜い〜い〜い〜い

おきあまふど〜舞おぬべた 同 續日本後紀 美和十二年正月丁巳 天皇召尾張濱主
於清涼殿前令舞長壽樂舞畢濱主即奏和歌曰於岐那度天和飛夜波遠良無久
左母支毛散可由留登岐介伊夫且萬毗天年天皇賞歎左右垂淚賜御衣一襲令罷
退このあゝの詞をうけるあり源氏君のま〜てま〜ゆ〜く春小ま〜い〜い〜い〜い〜い
うハ云との後へるま〜この詞の詞ありと嘉基りへる

おほやげ〜い〜い〜い〜い〜い 云同 云左 かくる若小か〜い〜い〜い〜い
世のあ〜い〜い〜い〜い〜い ば作者世中のま〜い〜い〜い〜い〜い 如此政小あ〜い〜い〜い〜い

こころいへばさかき

女こころちかども十の五 小橋よまこあまのこころあへん天子居下の子

こころいへばさかき

こころいへばさかき十の五 湖月或説より

葵巻

かこころいへばさかき二の五 源の中とくは後

こころいへばさかき五の五 小橋よまこあまのこころあへん天子居下の子

こころいへばさかき

女宮のこころいへばさかき十の五 小橋よまこあまのこころあへん天子居下の子

こころいへばさかき

こころいへばさかき九の五 け下小娘あまこころいへばさかき

こころいへばさかき

こころいへばさかき十の五 女君あまのこころいへばさかき

こころいへばさかき十の五 是も伊弉諾尊のこころいへばさかき

こころいへばさかき 書紀の注一書は甫富頭邊甫富脚邊とあり

本紀式部とは作者をいへばさかき

袖の上れ十の五 人の子を掌上珠とて漢語をいへばさかき

こころいへばさかき

こころいへばさかき十の五 一本ふきこえ出つと

花散里卷

とむらりるのめくも五のむらとむらりるの終ふとハ作者の亦を昇下あ
る意人よハ吳くとハも内を極めて人ぐうのすぐれをを思て思百あり
秋のま軒のつまとハだぐ橋とのまさむうひとあり橋を源に
比したる意あるべ
かぢさぬゆふハあぢさるべ六のむら草子地の詞あり次よそののす
へり傍注ひがとあり

須磨卷

と思ひぬふる残あん七のむら残の字衍あるべ七のむら下かぢさる思ひぬ
ゆるあぢあるべ

いとおもーろた同そよそよ向きのころーをいよまきるべ

とろくして哀のそつたせ九のむら下へけむるべ

ふとろりそよ十のむらもよりまきるゆもあつあんまどハ源氏君の昔

上よの終ふ辞あり中ふ父こハいとまぢより人のもあへ

まどハ草子地よりかのころりそよーげぞあまもあははあ極ある

とつゆを秋ーるをやどて源氏君の西廻のゆよま書かーるあり

たがかくおもひうけぬつこ十六のむらたがハ源の西廻にあへ上よつけてま

りてよむべー下ふとのこけえ終とあるをるるべ

あふいたぐつ上よとの終ふまといひて下よ入なるとあるをや師の

いそれるやぐすべては物倍ある秋をこまほえせしるありこれ作者
の用意あり

つこふうた身のもと 廿九のむら 右 つこいあ世の罪おて俗小因果あるは身とりよきあり源

氏君の秘もかくゆりまふべたといたがひてぬ束の秘もつとまふまきぬつこふ
うた身との秘ふまありあほの詞をよてあるべし

意どむて 廿三のむら 右 意どむてあくねとハ琴をさしあふかの思とあふり

思とあふり上ふよもの嵐をまきまふとあり行平々の松とまきつハ
みまひし例もあれむあり

ゆるり 廿四のむら 左 ゆるりの標あるべし

いとまはうある程 廿七のむら 左 仿注小一仕の回平年とあるはいく路の秘をいふ

しつとまこ中判

こせうれまぞね回ひて 同 思とあふりまきつハ標あり

仿注あやまあり

ましてをちとまうぬく 廿九のむら 左 まちまをちまのむらちとあふり

かへるあり

おちやけのがく 廿九のむら 左 かうハ勘しておいてれをえあり

しつとま 同 思とあふりの官のは詞これまでありまの下のふらあり

網をそくしてふべし

いも 卅十のむら 左 いも 思とあふり 思とあふり

いも 思とあふり

んはそそちちりたる 田のち んわそそざとあま〜があ〜るバーんの上の
字を〜

委すびきゆあるにゆりてあん 七のち ても〜あまかなのあるを小楢よ
〜とせ〜れ〜あるあ〜

うたをか〜ゆりてび 土のち 入道あり小楢よ〜とあるいろ下よ早〜

さ〜あが〜てはのっ小入なるとゆるはぬをてぬ後〜く〜てゆ〜ら
ざり〜ありちのちと〜いゆるふんを背〜が〜こま〜てある物
ぬるき〜ふ〜い〜は〜ん〜ぬあり

月ころのれすまひよりいごよあ〜ぬ〜うよ 土のち すまひの須たよ〜せあ
き〜ろ〜明石小〜せ〜る廻あり

〜あ〜る〜の〜抱哀あり 十のち よげあれたゆ〜も〜をぬ程少〜に

ある〜りいお哀ありとなり

か〜ま〜といふまを 十六のち 廣陵散あり〜ん〜と書たを

かから〜るい〜又廣陵散を〜ん〜とを〜ん〜と書たを
らば又廣陵散の稽康よそ地〜と〜信よ〜い〜小信〜るも
宋あり外ふる〜ま〜と〜のあ〜

す〜い〜思ひゆ〜よ 廿三のち 折〜〜麦あ〜か〜い〜

ころち〜う〜れさまなるある 同 お〜下入のつ〜たいを〜て疑〜に
のあやまりあ〜ん

よ〜りてすぐは年月 廿八のち ほどものあ〜き〜ゆ〜小楢よ辨せれ

しるがごとくされどねらうもていせき男女の中をいひていせきい人あは
ぬ程のゆをいふとせでいふるまじだといひのゆをいふはあはぬ程の
まも畢竟同い

明石上のうらみ

とらういの中も

こをつくこれ巻

ふらうびきささるうら

んの後いそ

もあふううよの移ひつらふよりていせきあがう我んの程のうとはし

きとあり優ある中初あり抄の伝はらう若深の伝はらう

いそつべくれ

かこがありうらとあがさう

と定められらういさううら上のぞの結びして下れあわさうのうと

行とすべ

いひけらうへるぞ

あうありな

うついでてすべさんをおもはんも

まはらう

まはらう

ひぢうらに

く小波一まうてんとおぢれ 世七のむら 左 一本おぢれよとあり

内りりの身を 世八のむら 右 上よこふらしてまるとあるをうけて二条

院への身を了。傍注深まり

蓬生卷

竹のこのよれうたふ一を 二のむら 右 け廻下のあぐさえ結の上ふあぶ一う

つ一渠あぶ一。廻をあはぶするまもあぶるあぶるうあぶるうあは

ふはるあぶ一あへくころ一

け宮を八ふもうれおよあきすきで 六のむら 右 一本あすだてとあるよる一

付従あといひ一はめのとこの 七のむら 左 一本あのは字あ一のをぶうくと

よろ一たじうく 七のむら 左 け下よりいをりなれををころし廻れ

落一あぶ一

と起く 八のむら 左 せうて 九のむら 左 結く 一〇のむら 左 流ら一あまうてと

く 一一のむら 左

思きあふをこ女 九のむら 左 まりよは句切するらう一。下へげよむを

一 一〇のむら 左 結く 一一のむら 左 流ら一あまうてと

いひて常陸まのまづまうてめ結よあくくせんああり

年ぶらあ 一二のむら 左 結く 一三のむら 左 流ら一あまうてと

一本 一四のむら 左 結く 一五のむら 左 流ら一あまうてと

一六のむら 左

哀小おつうあくて 十一のむら 右 おぼつうあうてとある一を深まるああり

—おがつらあへて—て宮の方のよとする時を哀ふとくもこもきこ
えぬあり

うしうやすくをきこ十九のむら注の候もとよりこら—小松の候もいざこ

ゑらぐろあろやれうる格ふ—に返す—もく—とよすあだ—

関屋巻

あひまのさう—らやあどぞ終のむらさう—ら空蟬をりるあて—

紀の守の廻ありあどぞとりふことを二つ重ねる—時の廻あ—ぬが

ありあなるは虫蟬よ向ひてりふ詞後なるは新カキほろときこえたり

繪合巻

おう—ときこ—め—て土のむらけ下は脱あるう又ハきこ—を流とあ

—を女保まける候

からのきををい—て十一のむら陪—てうふらぬうよまけるをり—

えいせつ—さぬおあれ十八のむらび—び—の誤あるべ—

命さいまひ十九のむら命と福分とやかくと三つあ—ぶをりふ

本ざいの—の物同本ざんハ上ふへる字回又ヤかく小同—その本が

いあ—ぬ事の雑藝とりよるあり

世の人あうあひきこえさせ世のむら世の人もとあるべきところあり

おほえおきるべき世のむらそんえ歴さうべれあり

さうべれさ金た云同是ハ源氏君二人の心をりふよあ—ず其後代の

すべての秘あり天子ハ知くま—ま—ても河の上ハ主—てうけて

いへまがくふまがれ上へのつづれ又下のおとどぞれとつふ詞あてやうあふべ
傍注より

松風巻

らうしつくまはるをふれど四のむらまどあふべ

くらきうぬんのまうい五のむらけ下のれ不との三字一本よあれを

うとれ

おこあひなま七のむらまうとくくと難いおふりふがは

うりれ

八のむら行てよ活てをうゆり

とかうおほ十のむらうばるるははるるを深まるあり

薄雲巻

つれ不おなく二のむらくくは白きりあり

あぢれあ四のむら明石上をどれする詞あり俗よらちもあいとまがは

あぢれあ七のむら一本あぢきあどあるあり

ちうれあ十のむらまとのぬすころよむくする詞あり細

小石上を引きつるあり

あはま十一のむらをちうしんの中こよんおまはてくくはあといふ

とまがいはすもとまりてねてらんとありまはいとさうよたはあれてう
くももへるありあよあまそとあるをんかべ

天べんちきり小廿四のむら一本天べんちちきりよとあるあり

故院の由ももろもろめく左同 故院の由ももろもろめく

きこありとなり

かゝるゆの例もあつたりやときうん右廿七のむら 小横よつせせる一本よとい

きうんとあふようくもきんえ以上のとびとかさなうり

あまこの例あつたり左同 一本のもーあたふり

こらりはりあん右廿八のむら け下にあんの二字落るべ

そのころの左廿九のむら ころかこを保するあふべーとこはひんあり

時よつけて見たまふ右三十のむら んあふふとあふべき廻ありふり

ころへ向まるとり

新魚巻

人のちめぬこさう右四のむら かる老人よ向ひ居てあつたり

きくい何の由あふもあつたり人のむまーれりかともあり湖月師

説こさうとくふようかま

くまふ左四のむら 一かいまれをいふとせうふ根の考への如

あふがちふやえ右六のむら 終よてきくげ下つげもむべ

さういふとる右同 花の由説たうとる但源氏君

は年の終よりいふとる福びとるいど位位のはよあはせては若く

ましまふあよりの昔よりいふあまめうたけのうひてんく終ふと

ふ右九のむら かゝるあふもあふとるいふとるあつたり

づう子めたふんのうりいぬをうま

ふら〜くおほ〜たるの 左同 めいひるの保ち

おちるごころ〜 右 十二のむら めいひるの保ち

おちるごころ〜

こそとせのあちしよ 右同 是巻の初は古院の

おやん〜 云とあるおどまて古院崩御の あをちるひま

〜 注 されば十年のあちしよ 保ちる べ〜

かよごよあ〜 右 十六のむら 注そよあ〜 保ちる べ〜

おちるごころ〜 保ちる べ〜

人づつ〜 右 十七のむら 上のあちしよ 保ちる べ〜

ふら〜 右 廿三のむら 保ちる

〜 保ちる

んぞ人よ〜 同 人をよごりて上よりつ〜 保ちる

〜 云同 效のさ〜 保ちる

巻とめの巻

いと哀よ 右 三のむら けつ草子地よ 下 のめき〜 保ちる

〜 保ちる

おやあ〜 云左 おほ〜 保ちる

〜 保ちる

〜 保ちる

〜 保ちる

於その非後をとむるありありす。賤の字のこもて俗よきもの
ふよあしむべし。すべてこのふあるれ注ども大小解あやまら
る。小格も心ゆるきべしとんそしり

とあつひびきうよ 同 ともあつひび古借よてこの頃より字はいよめぬもの
を大学の衆の書籍よて耳あきてけ詞をつかぎをうてたありひ
ざうハ今俗よ法外とつひきとまことゆ

何某をまゝに 同 あまうハひびきうの君をいふあり
座を引てまゝにひびあん 同 たりびひびりううひびせうまひりあん
しよめをく(ま)あり

とせのかまゝにひびきうを引て 十二のむら 右 えうせのあしりて

雅にまゝに(あ)をく注てん

おのこひきまをまゝに 同 ちやて句をまゝに下(し)けをひび

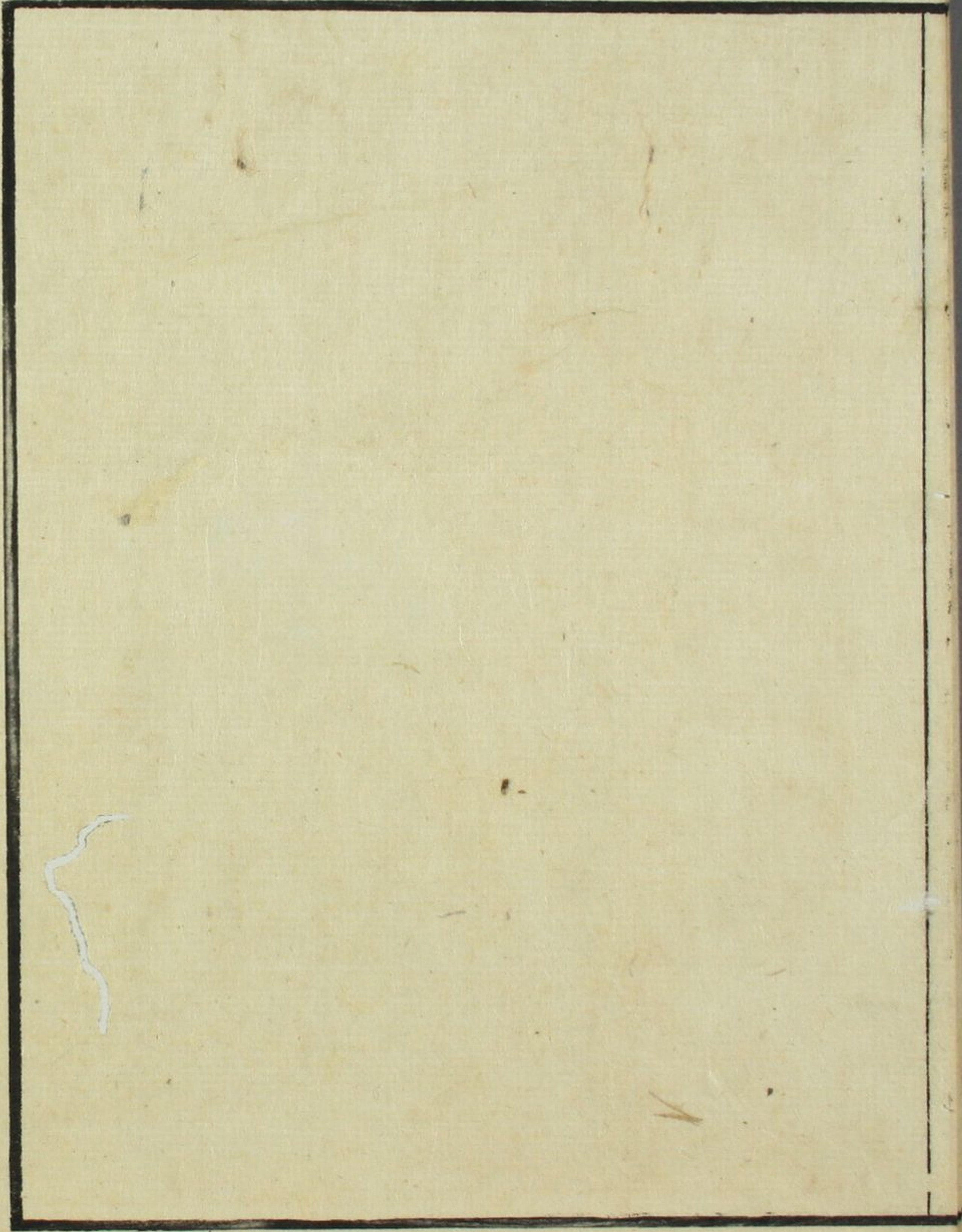
世のひびきまのよて 同 ちやまのひびきまのよてまゝの
師たま ちやまのひびきまのよてまゝの

ちのひびきまのよてまゝのひびきまのよてまゝのひびきまのよて
らせまひてあり注ひびきまあり

まよひてれん 同 一本よまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まよひてれん 同 一本よまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

くしりて 左 七のむら 右 ちやまのひびきまのよてまゝのひびきまのよて
ちやまのひびきまのよてまゝのひびきまのよてまゝのひびきまのよて

白紙



イ
イ

